

娘・母関係の物語（五）

山田 英美

第三部

はじめに

第三部では、筆者自身が、母親の立場になって娘との関係を洗い直して物語ることになる。これは自分と親との関係に對峙すること以上に気が重い仕事で、ぐずぐずと先延ばしにしていたが、ここにいたって後に引けない状況となり、蛮勇を奮うことにした次第である。

「物語」は、できるだけその時々々のメモなどを頼りに、二者の関係を辿っていくことにする。

* * *

「ミル（仮名）が生まれた丁度、ママもパパも一度も住んだことがないの……。」と、私は何ものかに（たぶん私の中の悪鬼に）、背

を押されるように口火を切った。小学四年生（九歳）の娘は、

「え？」と一瞬いぶかったが、私のそういう間接的な言いまわしに對して信じられないほどの察しの良さをしめし、

「ミルは、おかあさんから生まれたんじゃないの？」

「ねえ、いまのこと、うそ、だと言って——！」

「ミルは、おかあさんから生まれたかかったあ！」

と、大声で叫んで泣きじゃくった。

「これだけは間違わないでほしい。パパもママも、これまでとこれからもまったくおなじで、ミルは大切な、かけがえのない子どもだということには、なんら変わらないのよ。」

言ってはみたが、そんなござかしい説明は、そのときの娘にすんなり届くはずもなかった。私は猛烈な頭痛に襲われ、この收拾をどうつけられるのか、考えることもできなくなっていた。ただ黙してアタマをかかえているしかなかった。

しばらくして彼女は

「三十分も泣いたから、ミル、もう治ったあ。」と、暴風雨が去ったあとのように明るい表情で

「ねえ、おかあさん。わたしに話したこと、後悔している？」と覗きこんで聞いた。そして、

「わたしは、このおかあさんと、このおとうさんしか知らないから、このおかあさんたちの子どもでよかった！」と私の肩に手をまわして言ったのだった。

娘のまっすぐなこころの育ちに眼を見張る思いで、ただただ感謝した。しかし、問題はそれで解消したわけではなかった。むしろ、そこから彼女のその後の人生についてまわる重苦しい荷物―濁りが混った心理的競合ともいうべきものを意識させることになったことと一向に思い及ばない、未熟さを恥じ続けねばならなかった私である。

十歳近くになると、自我の発達のめざましさは想像以上である。九、十歳は、そういうことを話すのに適切な時期であるのかないのか、この子にとって早かったのか、遅かったのか。時期を意図したわけではなかった。なぜ、そのときに娘に話すことになったか。娘との関係の中で、時が柿を熟れさせて落とすような成りゆきと言うべきか。私にとって、その成りゆきの有様とは――。

そのところを、かなり遠い道のりではあるが、出会いから出発して考えてみることにする。

第一話 出会い

生後十カ月の幼いミルに初めて出会ったのは、A県N市にあったS乳児院である。当時私は、N市内の私立D大学に勤務していて、社会福祉学科の学生たちを伴ってS乳児院を訪ねることがあったし、単独で通うこともしばしばあった。仕事場で何らかの不満があったりすると、帰路、家とは反対方向に行く電車で飛び乗っていた。無垢な乳幼児たちの顔を見て、ちよつとした世話を手伝ったり、遊び相手になることがストレス解消になっていたのだ。また同時に、彼らの人生初期の生活が、愛着形成面からいっても普通ではない厳しい状況にあるということが、私の専門である乳幼児心理学の学問的関心を刺激したことも事実である。S乳児院に通い始めて数年経った夏も終わりに近いころだった。

つい最近T県U乳児院から移ってきたという、ベビー・サークルにつかまっていたはずんでいるその小さな存在に、私は「おいで」と両腕を差し出した。よちよちと歩みをとって倒れこむように全身をあずけてきた。私の伸展した腕にいささかの負担もかけない軽さ。「なんて軽いのだろう―」今は、もうまぼろしのように記憶にとどまっている、抱きとつたときに最初に感じた感触である。白い木綿の服を着せられていた。部屋全体にただよっているのと同じ清潔な匂いがしたが、ブラウスの片袖口のスナップが取れていてみつとも

なく開き、ほそい腕がのぞくのが気になり、つい袖口を折り曲げたりしてしまふ自分があった。乳児は、カールしたふわふわの髪の後ろを短く刈りあげられており、後頭下部のところどころに小さいふくらみがあった。なんだろうと、そっと指先でぐりぐりを触ってみたが、子どもは痛がるわけでもなく、おとなしくしていて、抱かれた心地よさを味わっている表情をしていた。

第二話 愛着ということ

乳児室にいる子どもたちは、強い日光に当たることが少ないせい、かほとんどの子が色白であか抜けし、清潔に世話されていてかわいい様子をしていた。洗濯場のおばさんや、調理師さんを含め、何人かの女性職員たちがそれぞれの相性でかわいがる子を決めて、手が空いているときには特別にかかわっていた。それが子どもの育ちに必要だという認識のあるなしにかかわらず、おばさんにとっても毎日がたのしくなることだったし、そういう仮の個人的親子関係をつくることに寛大な空気がS乳児院にはあった。その代わりに、仮の我が子が退院したり里子に出たりする場面での別れの切なさを、仮親は存分に味わうことになるのだが――。

若い研究者である私などが出入りして、雑談的にホスピタリズムなどについて話すことにも耳を傾け、「子どもの環境としてどうあるのがより望ましいか」を考えようとする姿勢もS乳児院の職員た

ちはもちあわせていた。私が自由に訪問できた背景には、乳児院の館長で学識豊かな三上孝基先生が、D大学の教授だということもあった。それは、本当にありがたいことだった。

乳児の側でも、大勢の大人が出入りする中で、自分を好いてよくだっこしたり笑顔を向けてくれる人の顔を、すばらしい識別力で見分けて、自分からも手を差し出し声を発して、その人を求めるようになる。愛着欲求は本来的な欲求であり、母との社会的結びつきを固めていくために子どもはあらゆるエネルギーを注ぎ込む。しかし集団保育の制約のために、乳幼児の要求が常になえられるわけではない。それどころか、日々充たされないことおびただしく、「いいないない・ばあ」の「ばあ」が保障されない日常があった。愛着形成は、世話などを通じてよく顔を見ていることも条件の一つになるが、それ以上にかわいがってくれる人、あたたかい人のまなざしが、より強い要因として働くものである。

こんな場面があった。こちらの都合で気まぐれに訪れた私と、ガラス戸越しに眼が合ったとき、ひとりでつかまり歩きをしていたミルは全身で嬉しそうに笑い、入っていくとさっそく「だっこ」をせがんでまとわりつく。手を洗うから待ってね、と言う私とその子の様子を見ていた貫禄のある看護婦長さんが近づいて、

「駄々をこねて先生を困らせないの。おばあちゃんがだっこしてあげましょう。」と引き寄せようとされたとき、小さな子はイヤといううすぐさで身をよじって婦長さんの手を避け、私の衣服をしつかり

と掴みなおしていたのだった。これまでにだっこしてあげようという申し出でを断られたことなどない婦長さんは

「おやまあ。結構でございますとも！」と冗談交じりのていねいなことばをつかつて、ミルにお辞儀をするしぐさを繰り返されたのが印象的だった。

訪問者が退室しなければならぬ時間がきて、ベビーベッドに座らせると、ミルは小さな口をまんまるのOの形にして、おーおーと哀しげな声を発して見上げる顔が、またたまらなくかわいかった。

「よくねんねして、元気でね。また来るからね。」と頬をなでてから離れていくとき、いつまでも乳児の視線が追ってくる感じに私自身も後ろ髪を断ち切る思いで、玄関口へ急ぐのだった。

入所施設などで「なつかれるこわさ、むごさ」をボランティアの訪問者はどれだけ自覚しているだろう。たいていの職員の人たちは初めから仕事と割り切って距離を置いたかわりをしておられるのかもしれない。いわゆる「博愛主義」も、大義名分としてあるだろう。しかし、博愛主義は、一人ひとりの子どもの愛着欲求の前にはまったく困ったしろものである。だがもし、大人の側のうがった論理で、仮の「親子関係を結んだ結果、ある程度定着した愛着を途中でふみにじって裏切ったとしたら、子どもの人を信じる心がこわされる……私はとんでもないことをしているのではないか、と一時悩んだこともあった。

しかし、将来子どもがもつとちがった対象と人間関係を結ぶ場合

にも、乳児期の発達課題である深い愛着関係を築く体験がまったくないことのほうが、一人の子どもの人格形成にとって重大な欠損になるのではないかと、私は考え直したのだった。同様の条件下にある大勢の中で、たった一人でもよい、ゼロよりよい。できる限りこの子の特別のひとになろうと。

日を重ねるにつれ、私は、できるものならこの子の愛着に責任をとりたいと心底ねがうようになり、最寄りの駅から施設への途中にあるカトリック教会の聖堂で祈る日々があった。久しく忘れていた「ひそかな恋心」の再来のような心持であった。

第三話 ひきとり

それはある種、奇跡だったと、今でも私は信じて疑わない。

ミルが一歳を過ぎたころ、関西のK市在の裕福な家庭でひきとりの話が進行していると聞いた。ところが、そのころ肝炎を患っていたミルの実父が亡くなったということがきっかけというが、その話をにわかには断ってきたという。生みの母親は出産の際に重症の妊娠中毒症で産児の顔もほとんど見ないうちに亡くなっており、幼くして天涯の孤児となったミル。

思い切って館長と院長に私の思いを打ち明けた。彼らはそういう意向自体をひじょうに喜んでくださったが、手続き上の実際は、里親申請から始まって順番待ちで、里親は特定の子どもを選ぶことが

できないという。たしかに考えてみれば、ベットを選ぶようなわけにはいかないことは自明の理である。

ずっと以前に、ある市部の「里親申請書」を取り寄せてみたことがあったが、色あせた用紙に旧態然とした書式、古いふり言い回し。母親になる者が職業をもつ家庭ではだめなどの条件。たしかに大変ではあつてもケース・バイ・ケースではないのか。つくつた人は何を考えているのやら……。そういう事柄や制度に行政が関心うすく形式主義で仕事をしていると思えてがっかりし、里親登録はどくにもしていない。すぐにミルを我が家にむかえることなど、とうてい実現しそうにないことだった……。

院長は、亡くなったミルの実父が、本児のS乳児院への移籍手続きをした地方の役所に、とにかく相談してみると言われて、何日かたったある日、思いがけない話があつた。

当時、その役所の児童福祉課の課長をしていた人が、思いもよらないことだったが、夫の大学時代からの親友S氏で、偶然院長がその人に直接電話をされたのだった。S氏は私の友人でもあつた。

「彼らの家庭ならば、太鼓判を捺してその縁組を進めましょう。」と、特別の配慮をする結論が出されたという。後で聞いたことだが、何ら煩雑な手続きに翻弄されることなく、超スピードで、法的にも、また、新しい親子関係づくりのための当人たちの準備状態からしてもこのようにスムーズに移行が運ぶというようなことは滅多にないことであり、異例中の異例だということであつた。

いきさつの一部始終を夫にどれくらい相談したか、などについては、今思い出そうとしても、何も憶えていない。夫はどちらかという慎重に、何事もかなりよく確かめた上で実行するというタイプの人だったが、私がミルということも熱中していることについて、ブレイキをかけるようなことを一切言つたことがなかつた。黙つてなりゆきを見守つていたというの不思議と言えなくはない。ずっと後に夫がしみじみと、

「君がぼくにくれたことの中で、一番すばらしかつたことは、ミルを我が家に迎えたことだよ。」と言つたことがあつた。

大学が春休みに入ると同時に、ミルは我が家の一員として、より広い世界に移り住むことになつた。一歳四ヵ月ごろである。退院して最初に立ち寄つた祖母の田舎家の畳部屋の端から端へ、何度も何度も、嬉々と声をあげつつ駆けていたことが、こちらの世界へ移ろうとする・イニシエの姿を物語つていた。(イニシエーションを体験している当事者)

第四話 あたらしい家と保育園

移り住んだ家は、Y県Y市にあつた小さな二階家で、裏庭が長屋の塀のない畑地となつていた。小さな畑の陽だまりで遊んだり駅前マーケットへ買い物に行つたり、ミルと私の蜜月はまたたくまに過ぎ、働く母親の保育に欠ける児童を、母親に代わつて保育する。

保育所に入れねばならないことは、わかっていたこととは言え、またあの「さよなら」の日々を思い出させる状況は、ミルにとつてストレスフルなことに違いなかった。住まいから近い保育園は、寺院が経営するこじんまりとした保育施設であり、樹木の緑陰がすがすがしい環境だった。しかし、幼い子どもにとつて、そんなことは二の次三の次で、「ママの代理」の小さなキリンのおもちやを園服のポケットにしのばせて行ったり、すべすべの布を引きずって歩いたりしなければならなかった。すべすべをさわりながら親指しゃぶりがミルのお得意のポーズだった。こういったいわゆる「移行対象」は小学校に入るころまでの大切なころの安定剤として、たいていの子どもが選びとる小道具である。過酷ともいえる状況をよく耐えて、一日の夕方にはママが必ず迎えにくる、という、「いないいないばあ」の「ばあ」が信じられるように日々を重ねていく以外になかった。

育児ベテランの保育士さんが、

「この夏からおむつはずし訓練を始めますので、家庭でも協力してください。」などと保育園でトイレット・トレーニングも主導的に始めてくださって、そういうものかな？と不思議でもあったが、ありがたかった。

ミルにとつてもう一つの課題は、それまで女性の大人としかかわわってこなかったのが、初めて会う人であっても女の子の人に対してはなんら警戒しなかったが、身近にいる種類の違う大人（パパ）との

安定したかわりを形成していかねばならないことであった。はじめは明らかに緊張し、恐怖すら覚えていたようである。しかし幸いなことに、その恐怖の対象は、焦つてなつかせようとはしないだけの心得があった。いとおしそうなまなざしを向け、忍耐強く毎日少しずつ接していた。そうするうちに次第に、だっこされても身をよじってこちらにたすけを求めることなく、パパの顔を手で触つたりすることも多くなり、やがて、夕刻に玄関前に人の足音が聞こえる

「パパー」と駆けて行き、誰も入ってこない

「パパ いない」とふしぎそうな表情で戻ってきたり、帰りが遅いときなどは「パパ がっこう」と自分で言つて納得するなど、確実にパパもミルの愛着対象に加わつていった。

第五話 「ミーちゃんだけの ママ！」

Y市の保育園には五ヶ月ほどしか在籍しなかった。夫の勤務先に近いK市への転居とともにまた新しい保育園へ移ることになったのだ。今度の住まいはエレベーターがない五階建ての四階にあったので、子どもがひとり階段を昇り降りするまでにはかなりの月日が必要だった。それでも親といっしょであれば手すりの縦棒につかまりながら一段一段時間をかけて自分の足を使おうとする。好奇心が旺盛で、それが多少落ち着きのない感じに見えるようとも、この子の

精神の活動性の高さを示すことと考えると、私たちはとにかくのびのび育つことを第一目標にしていたのだった。

ミルは小学校に入るまでこのK市立のF保育所にかよい、六年生の半ばまでアパートの四階に住んだ。

……自我が発達するに従いエピソードも増えるので、この間の思い出は多岐にわたるが、なるべく娘・母関係のことにしほらねばならない。「言葉の発達」に関しては、日本保育学会編『幼児と文字』保育学年報一九八〇年に所収（二六頁―四五頁）の、「幼児の成長と文字」という論文でミルの書きことばの発達を中心にまとめている。

新しい保育所は都市部にあつたので仲間が多かつた。状況把握もできるようになると、ミルはほかの子とママとの結びつきを極度に警戒した。登園して、靴脱ぎ場で同室の男の子がミルのママに「ばいばい」と手を振つたのを見て、いきなりその子のほっぺをわしづかみにし、「ミーちゃんだけの ママ」と言い放つた。夕方、遅くなって急ぎ足で来る人を指して保育士さんが、

「あれは誰のママかな？」と云えば、

「ミーちゃんのー」「ミーちゃんだけー」「ママだけのー」などと知っている言葉を並べ立てて泣き顔になって走り出てくる。こういったことについては、ごく初期の生活の中で、複数ママからアタッチメントの対象を選びとることに要した心的エネルギーと葛藤体験のことを考えれば、何度も主張し、さらに強化する必要があるのだろう

と理解していた。

第六話 仕事と育児の両立は？

私の職場はまだN市にあり、K市から長距離通勤を続けていた。

上部に頼み込んで隔週開講授業にしてみたい、出勤の週はN市泊りだった。幼いミルを伴なって新幹線に乗り継いでいく。これも過酷な生活状況と言わねばなるまいが、ミルはママといっしょならどこでもOKという快活さを示し、病気もめつたにしない子だった。電車がN駅に到着して、あわてて降りようとするママの傍らで網棚を見上げ、しきりに忘れ物を指差して教えてくれるような気丈さも現わした。

「ミルちゃんが教えてくれたから、忘れないでよかつたあ。ありがとう！」と礼をいうと、びよんびよんはねるような足取りでホームを歩くミルの満足な気持ちがつないだ手に響いてくる。

夜は私が借りていた粗末な宿舎に泊まって元気に過ごしたが、昼間の託児が問題だった。だがそこは福祉学を学ぶ学生たち。誰彼がすすんでキャンパス内につきあってくれたり、時には自分の下宿に連れて行って面倒を見てくれる女子学生がいたりで、ありがたいと言うほかなかつた。またミルも、教室内のカーペットの上で遊ぶ姿を学生たちが授業として、今、この場で観察する機会を提供することで、役に立てていた。

しかしたまには、どうしてもミルを夫に託して単身出勤しなければならぬこともあり、泊りが予定よりも延びたりしたら、たいへんだった。ミルは受話器を放さず、

「ママ、はやく、かえってきてー。でんわ切っちゃいやだー。」
しまいにはワーワー泣き声を私に聞かせ続ける。これにはパパも閉口しきっていたが、離れていればこちらは強気になって

「あなたは心理学をやっているのだから、他のお父さんのように良いとこどりじゃあない育児の裏の実体験ができて、ラッキー！と思つてがんばって！ハハハ…」などとのんきな励ましを電話口の夫に送つたりしたのも、彼が信じられればこそだった。

第七話 問題の親

一年半ほどはそうやって互いになんばっていたが、精神科医の松井紀和先生と知り合う中で、ミルが極度に離れがたく、ママが旅行かばんを用意して出かける気配を察すると、必死の形相で通せんぼをするなどなどを、私たちが困つたこと、ととらえているのをきかれて、

「のろけておられるのならよいですが、本気でそれを問題だと思つて親は、問題の親ですよ。」とびしゃりと言われた。その一言で、大人側の感覚で捉えていたことと、自分のことになるとわからなくなるものだと、ひどく反省させられた。「行っちゃいやだー」と主張

できるのはいたつて正常で、言えない子や、平気なほうがむしろ心配だと重ねて言われ、

「そんな遠くへ行かないで、ウチに来なさい。」と、どこまでも温かいサポートを示してくださつた。先生が立ちあげられた臨床心理クリニックのスタッフとして迎えてくださることになり、ようやくN市通いに終止符を打つたのだつた。

クリニックのメンバーとして子どものケースをいくつか持たせていただき、学びつつブレイセラピーなどを懸命にやっていたが、私たち夫婦がケースという言葉を使って会話をしたりするのを聞いて、どうやら楽しく遊ぶことらしいと察したミルは、

「ママ、ミーちゃんにもケースして！」とせがむこともあつた。

……翌年にはY大学に新設された幼児教育学科に就職が決まり、クリニックの勤務は短い期間だったが、それ以後も何かと松井先生には指導をいただくことになる。

第八話 「ほいっしょ いやよ」

—低空飛行

F保育所にはたまにはすんなり行く朝もあつたが、たいていは低空飛行で、気の重い日々だった。年中児（四歳）のころには、朝ごはんを食べた後に、園服を丸めて部屋の隅っこに捨てに行つては

「ほいっしょ（保育所）、いやよ。」といたずらっぽい顔でもどつて

くる。ミルにとって、水色の園服は保育所の象徴かあるいはそれを着ることが保育所に行くことをあらわすのだ。

有無を言わずに預けていった夕方は、迎えに行くとなんだかイライラして帰り道の対面にある菓子屋の前でまぎって

「アメかかってえ、チョコかかってえ！」とさわぐのだった。そんなときには、

「おんぶしようか、だっこしようか」「ついでにぐるぐる」とスキンシップを意図的に増やすことで、アメもチョコも霧消して機嫌のよい笑顔をとりもどし、しばらくすると、自分から「おきる」と宣言するのだった。

パパが迎えに行ったときには、すぐさまミルを抱き上げ、園庭の遊具でしばらくいっしょに遊んだりする。そんな様子を見ている保育士さんにはずいぶん甘やかしているように思えたのだろう、あるとき私に、

「お宅は甘すぎます、とくにお父さんは。」と、担任の保育士さんがたまりかねたように言われたことがあった。そのことを伝えると、夫は即座に

「この子は、徹底的にあまやかす必要があるのだ。」ときっぱりと言った。それくらいの気持ちでいたほうがよいとはわかっているが、しつけのためとか、世間の目とかに揺さぶられ、またそれ以上に自分の都合や感情でなかなか徹底できないのが、母親なのかもしれない。そうしてみると、母性とは何ぞや、母なるものとは？とい

う疑問がわいてくるが、母性が現実の母親の内に熟してくるときには、同時にいろんなものがぶら下がってついてくるので、純粹の姿を具現することなどありえない。身勝手で、どじで、それでいて、ある瞬間には、子どもにとってかけがえのない存在となりうる、そういう瞬間があれば、よしとしなければならぬ。・ウイニコットが言う、グッド・イナフ・マザー（ほどほどによい母）が現実の母親の規範であるとすれば。（Winnicott, D.W. 1896-1971 イギリスの小児科医かつ精神分析家）

—「おこるせんせい うんときらい」

年長児（五歳）になると精神発達が飛躍的に豊かさを増して見えてくる。朝もぐずることなく保育所に行くようになって、やれやれやつと、と胸をなでおろしていたのだが……。あるときから急にミルの言動に空想めいたところが目立つようになった。保育所では夏休みまでは年長児でも昼寝をさせる。幼稚園には昼寝の時間がないことを確かめたあとで、

「ミル、〇〇ようちえんに通うことになったの。」と近所のおばさんたちにも話し、

「園バスか、歩いていくか、どっちだ？」などとクイズを出したりしている。あまりに熱心に言うので、まわりの大人たちは次第に真に受けとるようになっていた。ついに保育所の担任にも、

「せんせい、ミルのお家、ひっこしたから、もうすぐ保育所をか

るの、ようちえんにいくんだよ。」と告げたらしい。半信半疑の保育士さんは、

「そんな大事なことなら、お母さんが何かいわれるでしょう」と言ったのですが。」と、迎えにきた私に確かめられた。

「あ、先生も巻きこまれましたか。最近なんだかそういうごっこの世界をしきりにつくっているんですね。」と、子どもがなんらかの窮地に追い込まれていることにまだ気づかない私は、軽く答えた。

〇〇ようちえんに行っているごっこは、日に日にエスカレーターしていき、もう幼稚園の先生の名前までつくって、それらが現実とすり替わるマジックの呪文のように繰り返す。その執拗さに、さすがに危険のシグナルを感じて、ある夜、

「ミルちゃん、ママとお話ししようか？」と誘ってみた。素直に応じて座ったミルに、いきなり

「××せんせい、好き？」と訊いてみた。

「〇〇せんせい？」と、へらっとして空想の幼稚園先生の名前を言うので、

「ううん、F保育所の××せんせい。」と、きつぱりと真顔で言ったところ、幼児は急に泣き出した。そして

「ミルは、年長さんになって、保育所がすきになっていたの。でも、おこるせんせい、うんときらい！」と、一気に吐き出した。

「どういうときに先生がおこるのか、言えるかな？」とさらに訊い

ていくと、昼寝のときに集中しているらしいことがわかった。五歳にもなると昼間眠らない子も増える。隣の子とつつきっこして遊んでいて、先生が近づくのには気付くと、ぎゅっと眼をつぶって寝たふりをする。他の子の布団をまめまめしく敷いたりする。などのことを、ことごとく叱られ、

「そういう子は、朝から夜までおひるねのある保育所へ行ってもらいいます。」ってせんせいが言ったの。「これは、△△副担任のほうの言だったらしい。××せんせい(担任)はそれほどでもないこともわかった。だからかろうじて登園拒否にならずに、お昼寝のない幼稚園に行っていることにして、毎日通うことができたのだろうと想像した。

さて、どうしたものか、と考えたが、

「ママが先生にお手紙を書いてあげようか？」と提案したところ、喜んで同意し、こういうように書いて、と文案を言う。そして

「ママ、きつと書いてね。おてがみ、枕のところに置いておいてね。」

と念を押して、久々に安心したような平和な顔で眠入ったのだった。その文案は次のようだった。

おひるねのとき

おこらないでください。

おこらないでくれたら

ミルは ねる子だから。

翌朝、どっちの先生に渡したい？と訊けば、ほんとうは△△せんせいに言いたいけど、××せんせいに渡したい、と言う。そこで、ミルの最近の度を越した空想の真相や、保育士さんの思いと子どもの気持ちとのずれのことを縷々つづり、ミル自身が書いてほしいといった言葉をそのまま、そして手紙を渡したい先生を指名したことなども書き添えて封筒に入れた。

それをミルに託して、私は一切、電話も直接話しもしなかった。大人たちが子ども抜きでことを処理するのではなく、子ども自身が解決に参加できるように、言いたくてもうまく言えないことをサポートすることで、子どもの自我の力が育ってくればよいと考えたのだ。保育所から何も言っていなかったのにもほっとした。

その日の帰宅後は、空想の幼稚園関係のあれこれが見事に半分減り、日を追うにつれて、消しゴムで消すように薄れていった。

夫は
「特効薬が効いたかな。」と冗談っぽく言っていたが、私は、手紙を読んだ保育士さんがどういう対処をされたのを知りたくてたまらない。

「お手紙をわたしてから、せんせいは、何て言われた？」ときいてみたが、ミルは
「わすれた。」と、おしえてくれない。

何日もたって、いっしょにお風呂に入っているときに、また、速

慮がちにそのことを訊いてみると、

「かえるときにね、××せんせいが、

「せんせいが わるかっただ」って、そう言ってくれたの。」

ふだんのミルの声より、一オクターブも高い調子で、しかしはっきりと、適切な言葉づかいで伝えることのできる五歳の力に、私は心底感心した。同時に、その保育士さんが、保護者に対して自分とやり合うことを優先したりせず、一園児の人格にきちんと向き合っており、シンプルにあやまってくださったらしいことにも、感激し、感謝した。

（ごめんよ、むりに聞いて。職業的関心をつい強引に出してしまっ、わるい親……）と内心で詫びながらも、よかったねーと、共に開放感をおじわった。

……この十二年ほど後に、ミルがアメリカで高校生活をおくる中で、寮監との間で誤解やトラブルがあつてとても困ったときに、寮監宛てに手紙を書いてくれないか（英語で！）と頼んできた……そのときに私は、この五歳のときのことを鮮明に思い出したことがあつた。

（続）

キー・ワード

愛着形成

移行対象

自我の育ち